

「崇高」概念から再考する日本のブルータリズム

—設計理念と表現手法の崇高論的分析による建築の再評価—

建築学専攻
建築設計研究

MJ23063 佐倉 園実^{きくら そのみ}
指導教員 原田 真宏

1. 序章

研究の背景

ブルータリズムとは、建築の材料や機能、構造などをそのまま露出させ、コンクリートの即物的なデザインを特徴とした、20 世紀半ばに世界的に流行した建築のひとつの傾向を指す。1970 年代になると次第に下火になり、その言葉を使う建築家は少なくなっていった。しかし近年、世界中でブルータリズムの再評価が高まり、相次ぐ書籍や写真集の出版を通して、そのスタイルが過去の潮流として懐古的なものでなく、現代も途切れずに続く一つのスタイルとしてとらえられ始めている。

海外の書籍のなかで、戦後から現代までの日本の多くの作品がブルータリズム建築として取り上げられているが、日本国内での再評価は遅れを取っていると建築評論家の磯達雄は指摘している。荒々しい外観から人々に忌避されやすく、老朽化や維持管理の課題も重なり、日本のブルータリズム建築は、現在存続の危機にある。

日本のブルータリズムは、海外からの流れを汲みながら、戦後の社会的な要求に基づき、仕上げを必要としない経済性や合理性などから多くのビルディングタイプに適用されてきた。戦後の発展と再生を願う理念のもと生まれる形態は、強い存在感、素材感、対立感などを伴い、ときに見るものを圧倒し、快と不快さまざまな感情を引き起こす。現代建築は、軽快さや親しみのある快い建築をめざす傾向があるが、ブルータリズムには、その理念や表現の強さから生まれる、建築の根源的な豊かさや感動があると考えられる。ブルータリズム特有の設計理念や表現手法をふまえた適切な価値評価が必要である。

研究方法と目的

日本のブルータリズムの戦後社会の願いを背負うあり方や、特徴的な造形の数々がわれわれにもたらす独特で複雑な感情や体験を、より適切に分析するために、「崇高」という美的概念を援用する。「崇高」とは、18 世紀の哲学者のエドモンド・バークが提唱した概念で、美が端的に快をもたらすのに対して、崇高は恐怖や混乱などの「苦」の感情が転化されることで「喜び」という特殊な快をもたらすものとされている。

本研究では、ブルータリズムには一般的な美とは異なる崇高性が備わっていることを仮定し、日本人建築家による実作の崇高論的分析を通して、ブルータリズムの新たな建築的価値や評価軸を提示することを目的とする。また、そこから得られた知見をもとに現代におけるブルータリズムを再考する。

研究の流れ

第 1 章で研究の背景や目的などを示し、第 2 章ではブルータリズムの案出の背景と定義の変遷を確認する。第 3 章では、「崇高」という美的概念の概要と、ブルータリズムの志向との親和性を示しながら、その特性を美学者らの言説から〈崇高の様相〉として整理する。第 4 章で日本のブルータリズム建築の概要を確認し、分析対象作品の設計理念と表現手法を抽出する。第 5 章で〈崇高の様相〉を用いて、設計理念と表現手法の崇高性を評価、考察し、その現代性を見出し、第 6 章で総論を導く。

2. ブルータリズム案出の背景と定義の変容

モダニズム運動の背景に、純粋性と自律性の追求が挙げられる。これは建築における精神作用や質料性を排除し、視覚性に基づいた「空間そのもの」を追求する志向につながり、建築の機能や形式を重視する形相>質料関係であったといえる。

20 世紀半ばになると、形式主義批判が高まり、スミッソン夫妻とル・コルビュジェによってブルータリズムが案出される。スミッソン夫妻のブルータリズムは、形相と質料の呼応と一致によって建築と人間の親和性を生み出すという建築への精神態度としてのブルータリズムであった。コルビュジェのそれは、モダニズムの形相に質料を伴わせるような方法でコンクリートの素材感や露出を手法としていた。どちらも建築を構築する材料や機能、空間を一体としてありのまま見せる、形相=質料関係をめざす志向であった。しかし案出以降、建築の構造や構成をありのまま表現する志向は、次第に建築要素の形式的な表現や、過剰な質感表現といった傾向へとつながる。(形相>質料、質料>形相関係)

本章では、ブルータリズムの志向と変遷を整理し、第 3 章の崇高概念との親和性の理解に役立てる。

3. 「崇高」の概念とその様相

崇高概念の確立に寄与したバークや美学者らの言説から、その仕組みや特性を抽出し、建築が恐怖や混乱といった「苦」、崇高性を潜在的に備えることを論述する。また、カントによる自律性の追求により捨象されたものをすくい上げようとする志向が、バークの崇高概念にみられることから、ブルータリズムとの親和性を推察する。バークをはじめ現代までの美学者たちによる崇高の特性を抽出し、〈崇高の様相〉と名づけ、ブルータリズム建築の設計理念や表現手法のもつ崇高性を分析するための評価項目を得る。

(i) 〈崇高の様相〉の抽出

抽出した崇高の特性を〈崇高の様相〉と定義して分類したところ、(1)困難性、(2)未知性、(3)荘厳さ、(4)正直さ、(5)空虚性、(6)質料性、(7)普遍性、(8)量塊性、(9)力学的、(10)自然との拮抗、(11)革新性、(12)変動性、(13)不動性、(14)スケールの逸脱、(15)多数性の 15 種の項目が得られた。

4. 日本におけるブルータリズム

日本のブルータリズムの広がり背景である、ル・コルビュジェの影響と、日本建築界における伝統論争について概観し、分析対象とする建築作品を選定する。対象は国内外の書籍においてブルータリズム建築家とされた日本人建築家による、新建築の 1954 年から 1970 年に掲載された作品を対象とする。選定できた 110 作品から、言及された設計理念と表現手法と、言及がなくとも写真から読みとれた表現手法を抽出する。

(ii) 設計理念の類型化

設計理念は 191 の意味内容を得ることができ、KJ 法で分類・整理した結果、34 種に小別でき、〈社会性〉〈文化/風土〉〈施工/工芸〉〈空間性〉〈人間らしさ〉〈受容者の重視〉〈意味的作用〉〈合理性〉〈構造体の効果〉〈技術革新性〉〈時間性〉〈計画〉の 12 種に大別できた。

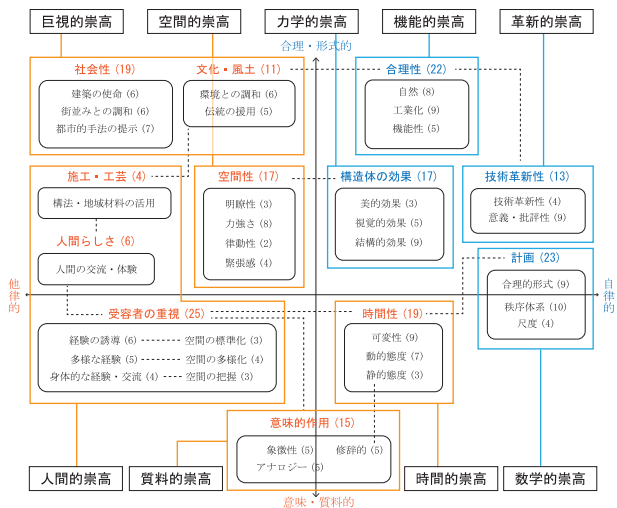


図1 (I) 設計理念の崇高論的分析/ブルータリズムの類型化

表現手法	01 ビロディ	02 配打敷し	03 肌理	04 巨大な柱	05 床板まの柱	06 垂直反ルバー	07 水平反ルバー	08 人間尺度の露出
崇高性								
巨視的崇高								
空間的崇高								
時間的崇高								
力学的崇高								
数学的崇高								
革新的崇高								
質料的崇高								
機能的崇高								

図2 (II) 表現手法の崇高論的分析

小別した設計理念はアイコン化して整理する。

(iii) 表現手法の抽出

設計者の言及があるものと、写真から読み取れたもの合わせて 175 種類が得られ、アイコン化して整理する。

5. 日本のブルータリズムの崇高論的分析と考察

(I) 設計理念の崇高論的分析/ブルータリズムの類型化

(i) 〈崇高の様相〉を用いて(ii) 設計理念の共通部分を明らかにし、日本のブルータリズムのもつ崇高性を類推したところ、【巨視的崇高】【人間の崇高】【時間的崇高】【空間的崇高】【力学的崇高】【数学的崇高】【革新的崇高】【質料的崇高】【機能的崇高】の9種を定義づけることができ、設計理念との対応を図1のように示す。

(II) 表現手法の崇高論的分析

(iii) 表現手法の抽出にて得た 175 種類の手法に対し、それぞれ当てはまる崇高性を段階的に評価したものを図2のように示す。

【作品別崇高評価】

(I)と(II)の分析をもとに、作品ごとの崇高性を評価する。設計理念と表現手法の崇高性を総合的に判断し、それぞれの作品の崇高性を「○○的崇高>△△的崇高>□□的崇高」のように表現し、特筆すべき作品群に対して類型化を行う。以上の評価を作品ごとにデータシートにまとめ、例と凡例を図3に示す。

【作家別考察】

特に該当作品数の多かった丹下健三、坂倉準三、前川國男、佐藤武夫、菊竹清訓らを中心に年表にまとめ、その設計の変遷を見ていく。

【時代別考察】

1960年代になると、ブルータリズムに残るモダニズム的な構造表現主義、形式主義などへの疑問が再燃する。人間性や体験を重視するあまり、質料的崇高にあたる操作が次第に強まる。これは第2章で確認した海外のブルータリズムの変容における質料>形相関係にあたるといえる。また、この疑問を代謝的、暫定的な建築—いわゆるメタポリズムの提案により乗り越えようとするも

No.	001
作品名	磨島計画
設計者	丹下健三
竣工年	1955(1946～1953)
新建築出典	新建築 1954年7月
建築用途	記念館
所在地	広島県
現状	○
崇高性の評価	ブルータリズムの類型
数学的崇高>巨視的崇高>力学的崇高	超越尺度型ブルータリズム
設計理念	アイコン・設計理念
表現手法	アイコン・表現手法
凡例	凡例

図3 (III) 作品別崇高評価データシート例

のもあり、これは時間的崇高に属する運動であった。これにより機能の露出、形式の表現の過剰がみられ、第2章で確認した形相>質料関係であったと考えられる。

【現代におけるブルータリズム考察】

調査したブルータリズムを類型化し、それをもとに現代建築を考察する。以下に一例を示す。質料的崇高を特に求める建築を「修辭型ブルータリズム」と定義すると、現代では限研吾の建築が該当すると考える。木や石などの素材の活用により、表面的な質感を重視し、建築に地域性や親しみをもたせる手法は、質料的崇高であるといえる。このような類型化と評価を通して、ブルータリズムの現代性について考察する。

6. 結論

以上のように、15種の〈崇高の様相〉をもとに、日本のブルータリズム建築の設計手法、表現手法を分析し、それらに崇高性があることを確認した。ブルータリズムは、戦後日本の社会的要請や指針を表現する示相的なものであり、時代のなかで揺れ動きながらも、信念を貫こうとした建築家たちの真摯な姿勢が見て取れる。ブルータリズムは、美的な現代建築とは異質な、根源的な感動に関わる崇高さを帯びた建築であるといえる。

建築の理念がどのような信念に基づき、建築の表現がどのような効果をもたらすのかを検証することは、建築設計における本質的な課題である。本研究では「崇高」という哲学的観点からブルータリズムを再評価し、その方法を示した。近代、現代建築を多角的に評価することで、未来の建築を描くための新たな知見が得られると考える。

参考文献

- 磯達雄『日本のブルータリズム建築』TWO VARGINS, 2023
- Phaidon Editors『Atlas of Brutalist Architecture』PHAIDON, 2020
- Owen Hopkins『The Brutalists』PHAIDON, 2023
- Alison & Peter Smithson 岡野真(訳)『スミッソンの建築論』彰国社, 1979
- Edmund Burke, *A Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757(エドモンド・パーク中野好之(訳)『崇高と美の観念の起原』みすず書房, 1999)
- 『新建築』新建築社, 1954, 1-1970, 12